

氏名:稲賀繁美

担当コース:文化

担当科目:日本文化演習・講義

感想など:

感想を綴ると言う日本の習慣は、教育上いろいろな害悪をなしている。学生諸君に学期中かなりの数の自主的レポートの提出を義務付け（「自主」と「義務」では矛盾してますね）、添削をして返却した。まず目指したのは、根拠を挙げない主観的感想文や、指令に基づいた事実調査の報告のみで、執筆の意図が不明な課題報告書の類からの脱皮だった。修士課程の一応の課題は、修士論文の完成となる。学問的な手続きによって自分の出張や

意見に形を与え、それを社会に伝達し、意見を交換し、世界に貢献する、その第一歩だ。一筋縄には行かぬ社会の複雑さや矛盾に気づき、だが「矛盾」や「複雑」と言った言葉に満足することなく、その背後にまで測鉛をおろす思考態度を養う訓練が、修士課程の重要な課題だろう。そこで必要とされるのは、「熱い心と冷えた頭脳」とか、「頑固な意思と柔軟な頭」、「大きな展望と緻密な調査」など。どれも言い古された言葉だが、ともすれば頑固な頭と柔軟な意思と言った反転を起こしかねないのが人間の本性だから、学問などと言う営みは、自己への規律が不可欠で、あまりに無理強いすると、精神にも障害が現れかねない。「人の技は盗め、だが、人のまねはするな」。とか、「うわさは信じず、情報は自分で出所を確かめよ」、だが「行き詰まったら、一人で悩まず、みあだこうだと、声高に騒げ、必ず手助けが現れる」など、一見矛盾した経験を積むと、それが人生の種となる。^木

「前書きは後書」などというの、人生に後悔しないためには便利な合理化の手段かもしれない。もちろん忍耐ある調査なくして、目の開けるような発見はありえない。だが忍耐したからと言って、発見が約束されるわけでもない。おうおうにして大発見は、疲労困憊の努力の後で、ふと緊張が解けた安逸の中で、恩寵のように天から頭脳へと降ってくる。そんな経験の糸口でも見つけてもらいたい、と思つての一学期の授業だった。終わりに近づくと、至らぬところ、準備不足、それに、一人一人の学生諸君に万篇なく対応はできぬ、自分の頭脳の限界などが見えてきて、かえって学生諸君から教えられることの多かつたことに思い当たる。たった4カ月だが貴重な経験に感謝申し上げる。教師が字数制限を破るようでは、役職失格だが、もとより反面教師。請寛恕。

センター通信

E-mail: bjryzx@public3.bta.net.cn

Web url: <http://www.ryzx.bfsu.edu.cn> (CERNET) & <http://bjryzx.cn99.com>

今号の内容: センターニュース、秋学期派遣教授の離任挨拶、小型国際シンポジウムの紹介、帰国着任の挨拶、ほか

センターニュース

- 9月23-24日 言語研究室「中日対訳コーパスの構築と応用研究」プロジェクトに関する国際学術シンポジウムが北京日本学研究中心センター3階電教室にて開催された。
- 9月 北京日本学研究中心センター文学研究室専任講師張龍妹助教授の著作『源氏物語の救済』が第8回関根慶子賞を受賞した。初の外国人受賞者。
- 10月20-21日 文学研究室が日本近現代文学に関する「日本文学における翻訳及び研究」を開催した。センター厳安生教授、東京大学小森陽一教授、青島海洋大学林少華教授、日本女子美術大学島村輝教授など、15名の国内外の大学教授や研究者が論文を発表された。
- 11月3日 文化研究室「近世の中日思想文化交流」プロジェクトに関する国際シンポジウムが開催された。
- 11月15日 社会研究室周維宏教授が日本国際交流基金のフェローシップによる東京大学での一年間の訪問研究を終え、無事に帰国した。
- 11月15日 二年生の修士論文中間発表会が開催された。
- 11月24-25日 文学研究室主催の「源氏物語」国際シンポジウムが開催された。
- 12月13-14日 三年生の修士論文答弁会が開催された。全員無事に合格を遂げた。
- 12月17-21日 北京日本学研究中心センター新施設の入札が東京で行われた。日本大成建設会社が落札し、2002年3月から着工する予定。
- 12月31日午後18:30-20:30 秋学期派遣教授送別会が「嶺南飯店」にて開催され、センターの教職員、日本側派遣専門家の先生方及びご家族、北京外国語大学の関係者、日本大使館や日本国際交流基金北京事務所の来賓各位が出席。
- 1月14日 冬休み開始。